

iUP

2014

IBARAKI UNIV. PUBLIC RELATIONS
MAGAZINE vol. 05

大学の国際化 特集号

INTERVIEW WITH PROFESSOR
CAMPUS VIEW rediscovered
Alumni
Meeting the Students
INTERNATIONAL EDUCATION

グローバルな
視点で見よ
世界は、動く
だから今、
大学は面白い



グローバルな視点で見よ。世界は、動く。 だから今、大学は面白い。

三村信男

Nobuo Mimura

茨城大学 学長

今日、日本は高齢化が進み、経済的な活力に陰が見られます。そんな時代にあっても、将来に夢を持ち力強く生きようと励む学生は少なくありません。ちょっと海外に目を向けてみると、世界では人口は増え、日本にさまざまな技術や交流を求めています。茨城大学が関わる東南アジアの国々などでも、若者たちは活力にあふれ、日本の若者との交流を求めています。世界のなかで日本がどのように未来を切り拓いていくか。大学は今こそ、「国際化」を通じて、未来を担う学生たちへの教育を果たしていくべきと考えています。

大学は、社会へ飛び立つ前の、教育プロセスの最後の舞台です。高校までは幅広い基礎知識を教えることが教育の大きな役割でした。一方、大学は学生がみずからの専門分野をしっかりと見定めて、その能力を伸ばしていく場と考えられていました。各専門分野の基礎的な学理は普遍性がありますから、海外で学ぶのも、国内で学ぶのも、それほど違いはありません。少し前まで大学では「国際化」が必要とは必ずしも認識されていませんでした。

「内なる国際化」を 身につける

ところが、時代は大きく変わって、世界とのつながりはますます身近になりつつあります。本当に、地球は小さくなりました。交通網の発展やインターネットの普及で、地球の反対側で起こった出来事が瞬時に伝わり、日本の政治、経済、文化に影響を与えるようになりました。まさに目の前で動いているダイナミックな世界にどれだけ敏感な



人間を育成していけるかという役割を大学は担うようになったのです。

国際化とは、いったい何でしょうか。大学を卒業して学生たちが世界へ羽ばたくということだけではありません。地元の学校で教員になったり、自分の町の会社や自治体で働いたりするときでさえ、世界の流れは今や無関係ではありません。また、

茨城県にも沢山の外国人が住んでいます。言葉も違う、文化も違う、育ってきた境遇も違う、そういう人たちと一緒に仕事ができるようになる「内なる国際化」が非常に重要になっています。茨城大学は「地域再生の拠点となる大学」を目指していますが、そのためには国際化は必要だと考えています。

世界に飛び込み、 学生は著しく成長する

留学であれ、短期の訪問であれ、海外での生活を体験することは、学生たちを著しく成長させるものです。

平成21年から「サステナビリティ学教育」という全研究科横断型の教育プログラムを大学院で始めています。「俯瞰的な視野」「深い専門性」そして「人間力」という3つの要素を高めることを目標に掲げて、幅広い知識と専門知識の両方を持った専門家の育成をめざしています。大学院であれば、ひとつの研究テーマや学業を深めていくのが従来の教育でした。ところが、いろいろな分野で活躍する人たちと交わらなければならないとき、自分の専門分野だけでなく、他の分野に関心を持って理解することがとても重要になってきます。

サステナビリティ学教育プログラムではそうした「人間力」を育てるために、「国



日本の若者は、世界に求められている。

【学生の好奇心に応える大学】

巻頭言

「今の学生は内向きだ」とよく言われます。しかし、私はそうは思いません。留学について紹介する集会を開くと、教室に入らないくらい学生たちが集ります。「米国の大学に留学してみたい」「アジアで学んでみたい」。いろいろな希望が寄せられます。追いついていないのは、むしろ大学の側なのかもしれません。学期のシステムやカリキュラムの見直しも視野に入れながら、学生たちの「世界へ」と向かう好奇心を伸ばしていきたい。それを全力でサポートする大学になりたいと考えています。

内・国際実践演習」を必修にしています。初年度には私も同行してタイのプーケット・ラチャパット大学に行きました。10日間の日程で、茨城大学からは15名。ラチャパット大学からはも約20名の学生が参加し、混成4チームに分かれて、この地域の問題を取り上げ調査し、その解決策を提言するという試みでした。ウミガメの保護、津波対策、水田の再生、森林の保護など、茨大とタイの混成チームが一緒に問題解決に取り組むわけです。

双方とも母国語以外は英語が少し話せる程度ですから、最初はおもいおぼいでしたが、互いに知恵を出し合って、自分の意見をぶつけていくなかで、学生たちは見る見る変化していきました。プログラムの最後には、英語とタイ語で大きなポスターを作り、村人の集会所で報告会を行ないました。英語も日本語も話せない村人たちが50人も集まり、にこにこしながら学生と談笑しているのは、信じられない光景でした。



教員が教えるのではなく、国も分野も異なる学生同士が教え合って乗り越えていくことで互いに自信をつけていくプロセスを目にして、ふだんと違う世界に飛び込むことで学生たちは成長することを確認しました。そういう経験は、卒業後の学生たちの財産として活かされていくことでしょう。このプログラムに参加した学生たちは、「同窓会を作ろう」と呼びかけあっています。このように茨城大学の国際化では、学生が成長することを大きな目標にしています。

何かの課題にぶつかって、そこで何とかして乗り越えたいという探求心から学業や研究は始まります。こうした大学での試みは、世界との交流と社会貢献につながっていきます。ここで学ぶ一人一人に、感性豊かにグローバルな視点で学ぶ機会を広げていきたいと考えています。

銀杏の樹よ、絵具だらけの白衣姿、覚えているかい。

長谷川裕久 Hirohisa Hasegawa

はせがわひろひさ[劇作家、演出家、俳優]
教育学部美術科在籍中に演劇活動を始め、卒業後「劇団SCOT」(主宰鈴木忠志)での俳優活動を経て、1989年水戸芸術館演劇部門学芸員に。96年より専属劇団ACMの作・演出を担当。『赤穂浪士』『美貌の流星』『花冠の大陸』『墮天の娼楽』は岸田戯曲賞の最終選考作品となる。96年台本・演出を担当したオペラ『さんせう太夫』は三菱信託音楽賞、ジロー・オペラ賞を受賞。2012年からフリーとなり、MITO DRAMA STUDIOを立ち上げ、子どもたちのための演劇ワークショップや俳優のための技術講座『アクターズラボ』を開催。2014年1月MDSカンパニー第1回公演として『新説経さんせう太夫』(作・演出)、8月に第2回公演『ふたりのマリー』(作・演出)を上演。



卒業から二十数年経った今も、大学時代の思い出は鮮明に蘇る。



楽しかった大学時代。でも、楽しいだけではなかった。だから、今がある。

春 先に一度来たんですが、随分きれいになりましたね。

美術科に入学して、すぐに演劇研究会に入ったんですが、向こう(正門に入って右・グラウンドの手前)にあった学生会館とか、あっち(正門に入って左・現在駐車場)にあったサークル棟近くの「装置室」に客席を作って、年に2、3回公演をしましたね。

当時も今も、図書館はここ。今頃の時期(秋)になると、このあたりは立て見ていっぱい。茨苑祭では美術科は巨大な立て看板を描きました。下書きは先輩たち、「立て看係」の1年生、2年生が指定通りの色を塗って仕上げました。

教育学部棟の、今ベンチがあるあたりは、窯芸専攻の学生たちのための「窯芸室」というプレハブの作業棟が建っていました。

た。僕も卒業制作は窯芸だったので思い出深い場所だったのですが、D棟のデザイン室には、夜通し泊まり込んで絵を描いている学生もいましたね。ここ(C棟)に来たのは26年ぶりです。2階が技術科、3階が家政科と美術科、4階が音楽科だったと記憶しています。ここの階段、塗りましたよ。美術科で。3階まで塗って終わりにしたら、音楽科の先生がいまして、「(4階は)自分たちで塗るから、ノウハウを教えてください」って。マスキングの仕方などを教えたら、音楽科の皆が一生涯懸命塗っていましたね。

音楽科には個人練習室があって、ピアノが教室ごとにあるんです。ずっと上の先輩達ですが、勝手にギターとかドラムを持ち込んでバンドの練習をしていて、ずいぶん怒られたなんて話も聞きました。

学内ではだいたい白衣姿でした。白衣

を着ているのは理学部の学生、教育学部の理科の学生か、僕ら美術科の学生。美術科はすぐにわかるんですよ、絵具だらけなので。同じ白衣でも、理学部は僕らにとってはワンダーランドでした。奥まったところにガラス工房があって試験管とかフラスコとか、実験器具を自前で作っていたんですよ。凄いですよね。今はどうなんだろう？

教養棟(現在の共通教育棟)の33番教室では、水戸芸術館で芝居をしていた頃、何年か講義をしました。音楽・美術・演劇のスタッフがそれぞれの分野の講義をしたんです。不思議な感じでした。なにしろ、試験ができなくて単位を落とした教室なのですから(笑)。

教室はセントラルヒーティング。エアコンなんてありませんでした。自販機なんて、あったかなあ。

サークル棟は、このあたりにずらりと。住んでるんじゃないかという学生もいましたよ。どんな夜中でも灯りがついていて人の気配がして。洗濯機が置いてありましたよ(笑)。

講堂も改装したんですね。このあたりで発声の練習をしました。茨苑祭の時に、ここで米米クラブのライブがあって朝から大行列。芝居の仲間が「朝飯を売ろう!」って。サンドイッチとみそ汁、作って売りに行きましたよ。ぜんぜん売れませんでした。売れるはずがない(笑)。

銀杏の木は、ちっとも変わらないな。

世界中のいろいろな劇場をまわって、ここに帰ってきて思うのは、水戸で芝居を始めた以上、水戸で芝居をやり続けることに意味があるんじゃないかなって。地方ならではの演劇をやりたい——、そんなきっかけを作ってくれたのは、茨大でした。



みずからの劇団に、演劇の魅力を存分に注ぎ込む。

CONTENTS

巻頭言 02
グローバルな視点で見よ。世界は、動く。だから今、大学は面白い。
三村 信男 茨城大学学長

HOME coming 2014 04
銀杏の樹よ、絵具だらけの白衣姿、覚えているかい。
長谷川 裕久 劇作家、演出家、俳優

INTERVIEW WITH PROFESSORS
世界を意識して異文化を学ぼう。 06

シュミット・ファイリック ロナルド 人文学部 准教授
世界の上昇気流を、みずからの力に 08

成澤 才彦 農学部 教授
坂上 伸生 農学部 助教
国境を超える好奇心は、社会貢献。 10

外岡 秀行 工学部 准教授
英国文学から国際力ある教員を育成 12

小林 英美 教育学部 准教授
共同研究が大学を国際化する。 14

森 聖治 理学部 教授

CAMPUS VIEW rediscovered 16

温故知新、大学の未来が見えてくる

Alumni
バスケットボール、広告代理店、ニューヨーク 20
人生をデザインする面白さ、感じて
エバタ・マサコ ビジュアルデザイナー / イラストレーター / アートエディター
今日の責任も明日の未来も、俺が決める。 22
そこから零が1に近づく。

松田 正哉 サッポロビール株式会社 首都圏本部 広域外食統括部 担当部長
国際化とは、相手を認識して尊重し、 24
一緒に未来を見つけて取り組むこと。
久野 恵子 ESUHAi Co., Ltd 顧客開拓・サポートチーム 書類申請業務担当

Meeting the Students
日本で、インドネシアで、異文化理解 26
ティナ・ヌルティナさん/小林芳江さん
留学は、やさしく世界への扉を開く教育制度 28
ルーシー・タワーズさん/玉造初音さん

INTERNATIONAL EDUCATION
海を越えていく、海を越えてくる学生たちの 30
異文化交流の拠点で、留学生教育のプロフェッショナルが
キャンパスの国際化に奮闘する。
八若 壽美子 教授/池田 庸子 教授

平成26年10月31日発行(年1回)
発行 茨城大学広報室
〒310-8512 茨城県水戸市文京2-1-1 TEL029-228-8008
企画・編集 パーク株式会社
印刷 株式会社コムラ

世界を意識して異文化を学ぼう。

英語を使って人と交わる経験が、実用的な語学力を育てる。根底にあるのは、英語は単なる語学教育ではなく、もっと異文化に近づくためのツールであってほしいという願いだ。コミュニケーションは聞き上手だけでは成立しない。みずからの意見を持って、人の意見と交わりを持て。そこから異文化の共有が始まる。

シュミット-ファイリック ロナルド

Ronald Schmidt-Fajlik
人文学部 准教授

1965年スロバキア、ブラチスラバ生まれ。チェコスロバキアでは、「ブラハの春」の自由化運動が始まった1968年、3歳で両親と共にカナダへ移住した。1993年来日。中学・高校の英語教育現場で活躍。2000年University of Manchester修士課程(M.Ed. ELT)修了。2005年から茨城大学人文学部に勤務。2014年現在、准教授。



宇宙について、自分の故郷について、または趣味のマジックについて、というように、プレゼンテーションの課題は自由。(撮影で入った)今日の授業は、ファイナル・プレゼンテーションの時間でした。1年生の必修の授業で、週に2回英語の基礎を学びます。教養科目の授業ですから、他学部の学生たちも履修し、スピーキング、リーディング、ライティングのほか、2つのエッセイを書くことが履修課題になっています。

いくつか、教室外の課題もあって、インターネットを使ってオンラインで英語を学んだり、テキストに付随するCD-Rなどを聴いてレポートを書いたり、英書を読んで英語

でブックレポートをまとめたりします。「英語で」ということにまず驚き、いざ始めると今度は自分が意外に英語を使えることがわかってまた驚くといった具合に、授業や課題を愉しんでいる様子がレポートなどからうかがえます。多くの学生にとって、初めての冒険みたいなわくわくする体験です。

一人一人が個性を 持てることに感謝したい

2005年からここで教え始めて、今年で9年目になります。日本の大学の授業のイメージは、教室の前に立って授業を行なう、教員中心の授業という印象でした。今では茨城大学でも、アクティブ・ラーニング

を推奨していて、教授の指導のもとで、学生がみずからリサーチをしてデータを集めて発表するというスタイルを積極的に進めています。

私のクラスでは、私が教壇に立ってレクチャーをすることはごく稀です。学生同士で互いに英語のスキルを磨き合うような機会を数多く設けています。ペアで、グループで、さまざまな課題をこなしてもらいます。これは1年生のクラスなどでは友だち関係を創ることに役立っているようで、みな生き生きと楽しく授業を受けています。

比較文化のクラスでは、英語のスキルを学ぶというより、そのコンテンツに重きを置いています。たとえば、Eメールを利用し

Challenge yourselves to become independent thinkers.

でサウジアラビアや台湾、ロシアなどの学生と交流する機会を設けています。学生たちは、相手の国の文化についてたずねたり、みずからの国について紹介したりしながら、英語の文法だけでなく、他の国々の文化を学びます。英語はグローバル言語としてますます広がりを見せています。英語圏の人だけでなく、英語を母国語としない人たちとも英語を使ってコミュニケーションすることができるのです。英語は異文化理解に欠かせない言語と言えるでしょう。

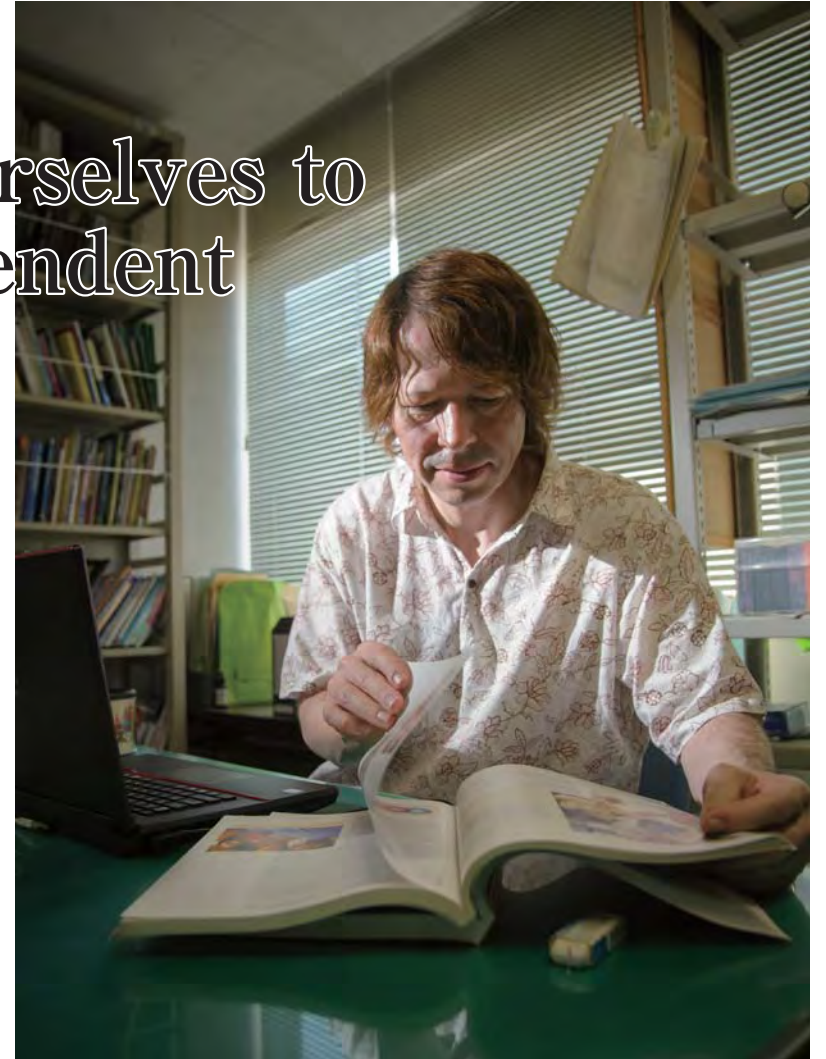
日本のように少数民族がごく少ない単一民族に近い社会では、私の国カナダなどと比べて、異文化を共有する機会が少ないのではないのでしょうか。他の国以上に、ちょっと意識して他の文化を学ぶ努力が必要かもしれません。単一民族の社会でありがちなのは、他の人も自分と同じ考えだろうと錯覚することです。同じ文化の中で育った人々でも、人は一人一人違います。同じ国にあっても、一人一人が個性を持っていることに気づき、感謝したいものです。



Have a questioning attitude.

カナダの学生は、教授の意見に反対でも賛成でも、自分自身の考えを述べることに慣れてしています。日本では教授を敬いすぎて、教授の意見に関わることに、意見を交わすことに積極的ではないように思えます。

私はよく学生に言います。「他の学生の意見をよく聞いてごらん。そして、自分でその情報を調べて、自分自身の意見を持ち、相手に投げかけてごらん」と。コミュニケーションは、ただ話し手の話を聞くだけでは成立しません。誰かが言ったことをただオウム返しに繰り返すのではなく、自分自身の意見を持つ、ひとりの自立した学ぶ



人間を育てていきたいのです。

異文化というのは、コミュニケーションのきっかけになるものです。私は3歳の時に家族とともにスロバキアからカナダへ移住しました。カナダでも家ではスロバキア語で会話をしていましたから、19歳のときに移住後初めてスロバキアへ戻って親類に会った時には「(スロバキア語を)よく覚えていたね」と驚かれたくらいでした。数年前にスロバキアの民話を日本語で翻訳・紹介した本を自費出版したのですが、カナダ人、日本人、それぞれ言葉や文化が違っていても、スロバキアの文化を伝えることができることを嬉しく思いました。本を通じて、新しい出会いもたくさんありました。異文化理解は、そんな出会いをたくさん作ってくれるものなのです。

世界の上昇気流を、みずからの力に。

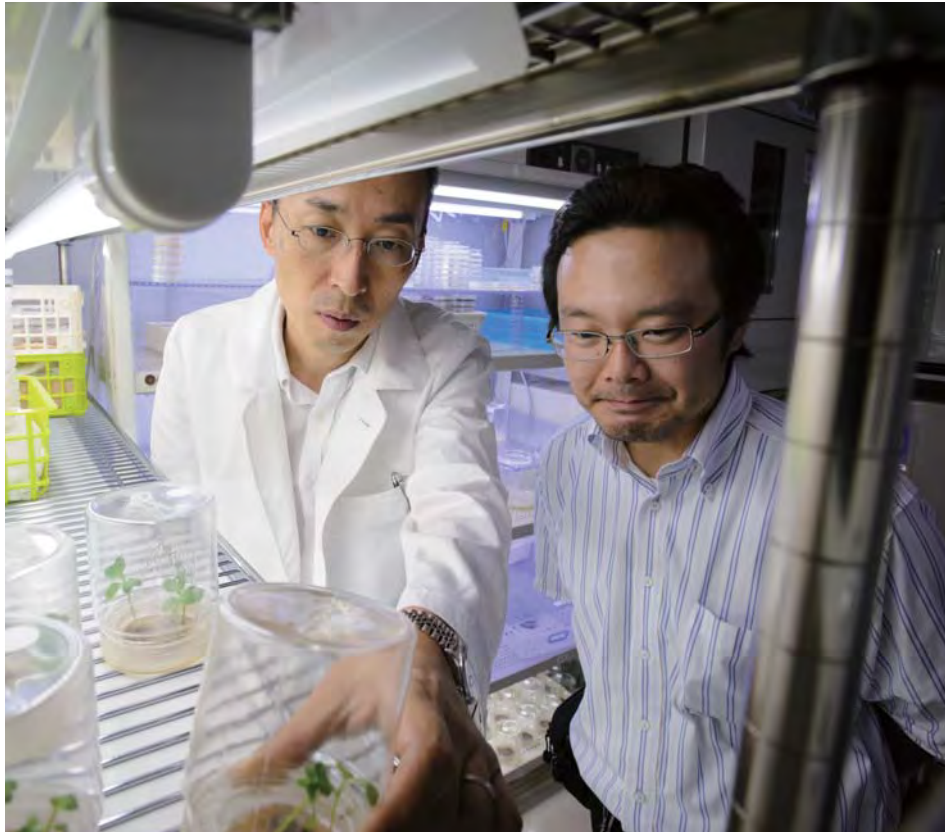
日本の稲作は、春に田植え、秋に稲刈り。収穫は1回だ。インドネシアでは、田植えしている田んぼの隣で稲刈りしている……。そんな光景を見るときの学生の驚きこそ、グローバルな体験の賜物だ。大学時代は、日本の中だけで形作られた「常識」をひっくり返す、またとないチャンスだ。海外との共同教育の意味するものは、異文化交流を通じた「非常識」への感動なのかもしれない。農学部はそんな驚きの機会を着実に根づかせている。

成澤才彦 Narisawa Kazuhiko
農学部 教授

坂上伸生 Nobuo Sakagami
農学部 助教

東京都生まれ。1993年筑波大学博士課程農学研究科農林学専攻修了。2013年茨城大学農学部教授。未知の微生物、特にエンドファイトを研究することで植物栽培の困難な土地の緑地化、農耕不適地の克服や環境浄化、次世代の環境を守る持続型の農業技術開発などを目指す。

1980年東京都生まれ。2008年東京工業大学博士後期課程大学院総合理工学研究科環境理工学創造専攻修了。2011年茨城大学農学部助教（ダブルディグリー・プログラム）。森林土壌における菌核の形成・蓄積と微生物、土壌生成などの研究にたずさわる。



視点を変えて 世界を眺めてみよう

新宿育ちですが、子どもの頃は野原も自然も結構残っていて、昆虫をつかまえたりしたものでした。大学では植物と共生している微生物を研究していますが、その頃の生き物たちとの出会いが、今の研究につながっています。研究しているのは、カビです。カビにもうひとつの微生物であるバクテリアと一緒にくっついていて、植物の生育に関わっている。その複合生物系の関係を明らかにしていく、そんな研究をしています。

坂上伸生先生の研究もカビが関係していて、菌糸が密に集まって作られる「菌核」と

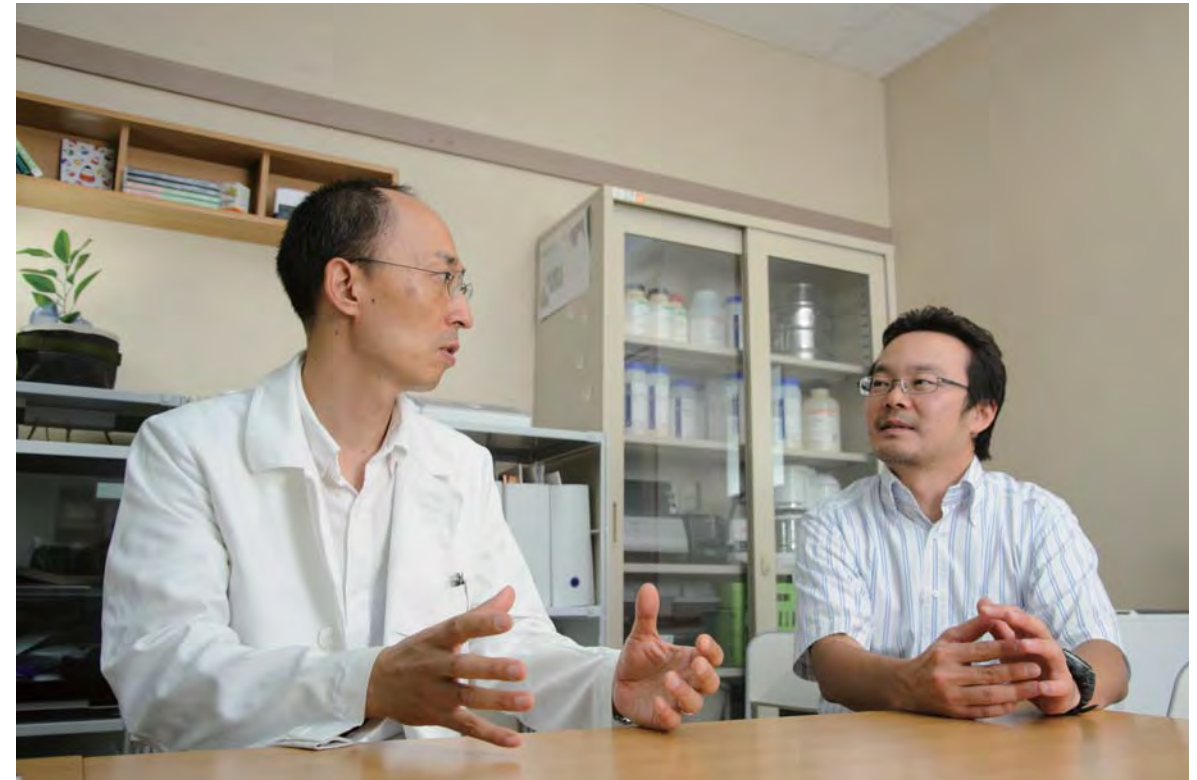
いう丸い塊について研究しています。坂上先生とは現在、大学の国際化に向けて、農学部でさまざまな取り組みを行なっています。

茨城大学では、日本人学生の海外留学と外国人学生の受入れを行ない、国際教育の連携の取り組みを支援する「大学の世界展開力強化事業」(文部科学省)を、東京農工大学・首都大学東京とともに推進しています。

さまざまなフィールドに学生を連れて行く実践型の教育に力を入れながら、本来学生が持っているやる気と能力を引き出そうというのが、このプログラムの狙いです。やる気がある、いろいろなことに挑戦したいという学生の期待を芽吹かせてやろう、そういう学生

が増えてくれば、周りの学生を巻き込んで向上するのではないかと期待しています。

ひと昔前の社会には、努力次第で上昇していけるような気運があって、学生は勉強したりして何かに励んだものです。今の日本にはそういう上昇気流は乏しいかもしれません。頑張っても、人口は減っていくし、景気は悪いし、問題は山積。将来に希望を持ってない、夢を描けないと守りに入る学生が多いのも事実です。しかし、ちょっと視点を変えて世界を眺めてみると、日本の学生たちを必要としている国がたくさんあるし、上昇気流も吹いています。そんなことに気づいてもらいたいというのがわれわれ教員の願いです。(成澤才彦)



挑戦したいという学生の期待を芽吹かせたい

最初に私が担当したのは、大学院修士課程の学生が茨城大学とガジャ・マダ大学の双方の大学院に所属し、それぞれの大学で修士論文研究を実施することにより双方の大学の学位(修士)を取得することができる「ダブルディグリー・プログラム」でした。同プログラムに参加して学位を修得した学生は、現在のところ、ポゴール農科大学の学生が2名。今年の秋にはもうひとり、修了する予定です。たいへん難関なプログラムだと思いますが、国際交



日本人学生との輪を大事にする。

流が良好に進むからといって、学位の質を落とすことはできません。日本人学生の学位取得は来年春に第一号が期待されています。

インドネシアの大学との共同研究で良好な関係が築かれるにつれて、学部の教育でも一緒に何かやれないかという動きが生まれてきて、その輪は東南アジア各国に広がりつつあります。ポゴール農科大学とガジャ・マダ大学は、AIMS(ASEAN International Mobility for Students)に参加する大学です。AIMSは2009年マレーシア・インドネシア・タイの各国政府が共同で立ち上げた教育連携を基礎として、2012年にベトナムが加わり、2013年にはフィリピン、ブルネイ、そして日本も参加することになりました。日本からは11大学が参加し、茨城大学もそのひとつです。

農学部と理学部には「地域サステナビリティ学コース」を設けて、AIMSの学生を受け入れています。一方、茨城大学からも、インドネシアのポゴール農科大学とガジャ・



留学生の研究は学内に新しい風を吹かせる。

マダ大学、タイのカセサート大学へ交換留学生を派遣しています。この8月末に5人の農学部の学生たちがインドネシアに向けて出発しました(1学期・約4か月間)。出発の前には、農学部の国際交流会館でインドネシアからの留学生たちが集まり、楽しく壮行会を行ないました。

海外に行っても臆することなく、外向きに力強く生きていく力を身につけることは、きっと逞しい人間力として学生たちの財産になると信じています。(坂上伸生)

国境を超える好奇心は、社会貢献。

日本では経験できないような場所で、いろいろな機材を使い、海外の研究者と一緒に実験をする。得られたデータを解析し検証しながら議論をする。学生たちは海外へ行くと、遅くなって帰ってくる。物怖じすることなく、堂々とみずからの研究を進め、学業に専念するようになる。大いなる成長と変化は、日本人学生だけでなく、この大学に学びに来る留学生にも大きな恵みを与えている。



外岡 秀行 Tonooka Hideyuki
工学部 准教授

1969年静岡県生まれ。1994年東京大学大学院 工学系研究科資源開発工学専攻修士課程修了。博士(工学、東京大学)。1994年、茨城大学工学部情報工学科助手に着任、同大学IT基盤センター准教授などを経て、2009年に同学科准教授に就任。リモートセンシングや画像処理等の研究に従事し、特に熱赤外リモートセンシング画像の処理と応用を中心テーマとする。1995年より、経済産業省開発の地球観測センサーASTER (NASAの衛星Terraに搭載)の日米合同サイエンスチームメンバーを務め、2011年からはNASAのHyspIRIプロジェクト、2013年からJAXAのCIRCプロジェクトにも参加する。日本リモートセンシング学会の前事務局長、現在、評議員。

国内外のさまざまなプロジェクトに参加して、国内外の研究機関との活動を展開しています。もっとも長く関わっているプロジェクトは、経済産業省開発の地球観測センサーASTERです。ASTERはNASAの地球観測衛星Terraに搭載されているセンサーで、そのデータをどのように処理し、いかに有効利用していくかを議論する日米合同サイエンスチームのメンバーとして、1995年から関わっています。2020年頃に打ち上げを目指しているNASAの次世代ハイパースペクトルセンサ HyspIRIの国際サイエンス研究グループに参加しており、この5月に打ち上げられたJAXAの「だいち2号」に搭載された地球観測用小型赤外カメラCIRCのデータ処理などにも関わっています。また、本年に打ち上げが予定されている次世代の運輸多目的衛星「ひまわり8号」でも、データ評価に協力する予定です。

私の研究室では、リモートセンシングや画像処理に関する研究を行なっています。

リモートセンシングとは人工衛星や飛行機に電磁波をとらえるセンサーを搭載して画像データを収集する技術です。日々の天気予報、災害監視、環境評価、資源探査などいろいろな分野でこの画像データが利用されています。リモートセンシングというと人工衛星やセンサーそれ自体が

脚光を浴びがちですが、得られたデータを処理する設備(地上系)も極めて重要です。私たちは、衛星画像からよりよい情報を抽出する手法やソフトウェアの開発、衛星画像の評価と品質改善、そして衛星画像を利用した災害評価や環境モニタリング、地質マッピングなどの応用研究を進めています。衛星画像データを今よりもさらに活用した高度情報社会の実現に貢献するのが、私たちの目標です。

若いうちに 国際的経験をすることは、 大学教育に極めて大切

で大切なことだと思っています。

日本の人材育成、そして、技術研究を通じて海外の人材育成も

いまや人工衛星のデータは、一部の先進国の人びとだけのものではなく、世界の人びとの公共財となりつつあります。各国が抱え持つ多様な問題を解決する有効な手段として、いま衛星データは広く注目されています。

たとえば、私たちの研究室では、スリランカからの留学生が自国の湖沼の水質問題を解決するため、人工衛星の観測データを遡って分析し、過去20年、湖沼がどのように変化してきたかを調べ、この研究で博士号を取得しました。中国の新疆ウイグル自治区からの女子留学生は、ウイグル自治区の炭田火災の評価を目標に衛星データの解析を行いました。ウイグル自治区では石炭が地下で燃えてしまう炭田火災という環境資源問題があって、なかには百年以上も燃えているようなものもあります。その留学生は、衛星データを使って炭田火災を検出する方法について修士論文を書きました。

アジア圏を含めた世界中の人びとが、衛星データを使って自国の問題を解決することは素晴らしいことです。ところが、こうした解析を行う知識や人材が不足しています。このようななかで、われわれの知見をぜひ役立ててもらいたい、アジアのキャパシティ・ビルディング(能力強化)に一役買うことのできる研究室になりたいというのが、私たちの目標です。日本、そして海外の人材育成に、大学の国際化は欠かせません。



人工衛星のセンサーは、程度の差はありますが、さまざまな要因で少しずつ劣化していきます。その劣化したセンサーのデータをそのまま信用して処理をしてしまうと、間違った解析結果を導いてしまう恐れがある訳です。たとえば何十年といった長期の環境変動を解析する場合は、使用するセンサーは複数世代、組み合わせることになります。ある期間に使ったセンサーのデータが劣化によりちょっとでもズレていると、その期間にあたかも環境変動があったかのように見えてしまいます。ですから、衛星データを正しい値に校正したり、正しいことを証明するという作業が重要になってきます。研究室の学生たちは、こうした衛星データの校正のノウハウを学び、国際経験を積んでいきます。

学生には、国際プロジェクトや国際会議に参加して、刺激を得て知的好奇心を最

大限に発揮し、大きくなってもらいたいと考えています。去年は計4回、院生・学部生で延べ7名が海外での実験に参加したり、NASAの研究所で実際にデータを収集したり、海外の国際ワークショップで研究発表をしたりしました。若いうちに国際的な経験をすることは、一研究室の研究に寄与することはもちろん、大学教育にとって極め



海外の学生との共学は、日本人学生にとっても刺激的だ。

英国文学から国際力ある教員を育成。

海外の人との交流に必要なのは、言葉とコンテンツと慣れだ。英語の文法や英単語は大切。でも、なぜ話せないのだろうか。言葉を学んでも、会話をつなげる話題や知識が乏しいと、交流は生まれない。相手を知ること、自分を知ること。そして、交流の機会を意図的に設けること。アカデミックな世界に身を置くからこそ、学生たちには本物に触れてほしい。ありのままの異文化体験に導かれながら、今日も英国文学の魅力を伝え続ける。



小林英美 Hidemi Kobayashi
教育学部 准教授

1967年生まれ。2001年早稲田大学大学院博士課程教育学研究科教科教育専攻修了。1997年から1年間、国際ロータリー財団留学生として英国オックスフォード大学で研究。2003年茨城大学教育学部准教授。18世紀から19世紀の英国文学を専門とし、特に当時の読者の文学受容の歴史的事実と文学への影響を、販売書籍の予約者一覧表と定期刊行物掲載の書評を利用して明らかにしようとしている。教育分野においては、英国文学への関心を高め、将来学生が教員となった時にそれを援用できるように、音読の実習や教室発表、マザー・グースを暗唱する授業などを、映像・音声教材も活用しながら行っている。

に「必要」な言葉であるから「興味」が持てて、身につけるのもストレス・フリーなんです。この少年期のアメリカでの体験は、英語教育観の根底にあります。そしてもちろん、英語文化・文学研究の入口にもなっています。

帰国すると、すぐに中学校でしたから、そのまま英語への興味を持ち続けることができたことは幸いでした。大学は教育学部に進みました。教員志望でしたので。2年生の時、「外国文学」の授業でロシア文学に出会ったことで、海外文学の道へ導かれました。19世紀のドストエフスキーから現代のソルジェニーツインまで、とにかく中身が濃かったことに衝撃を受けました。異文化圏の人々の心の有り様などが丁寧に描かれていて、長編を読むのも苦になりませんでした。このとき、先を急がずに作品を味わって読むことも覚えたのだと思います。ロシア文学から英国文学へ傾倒していくきっかけになったのが19世紀の小説

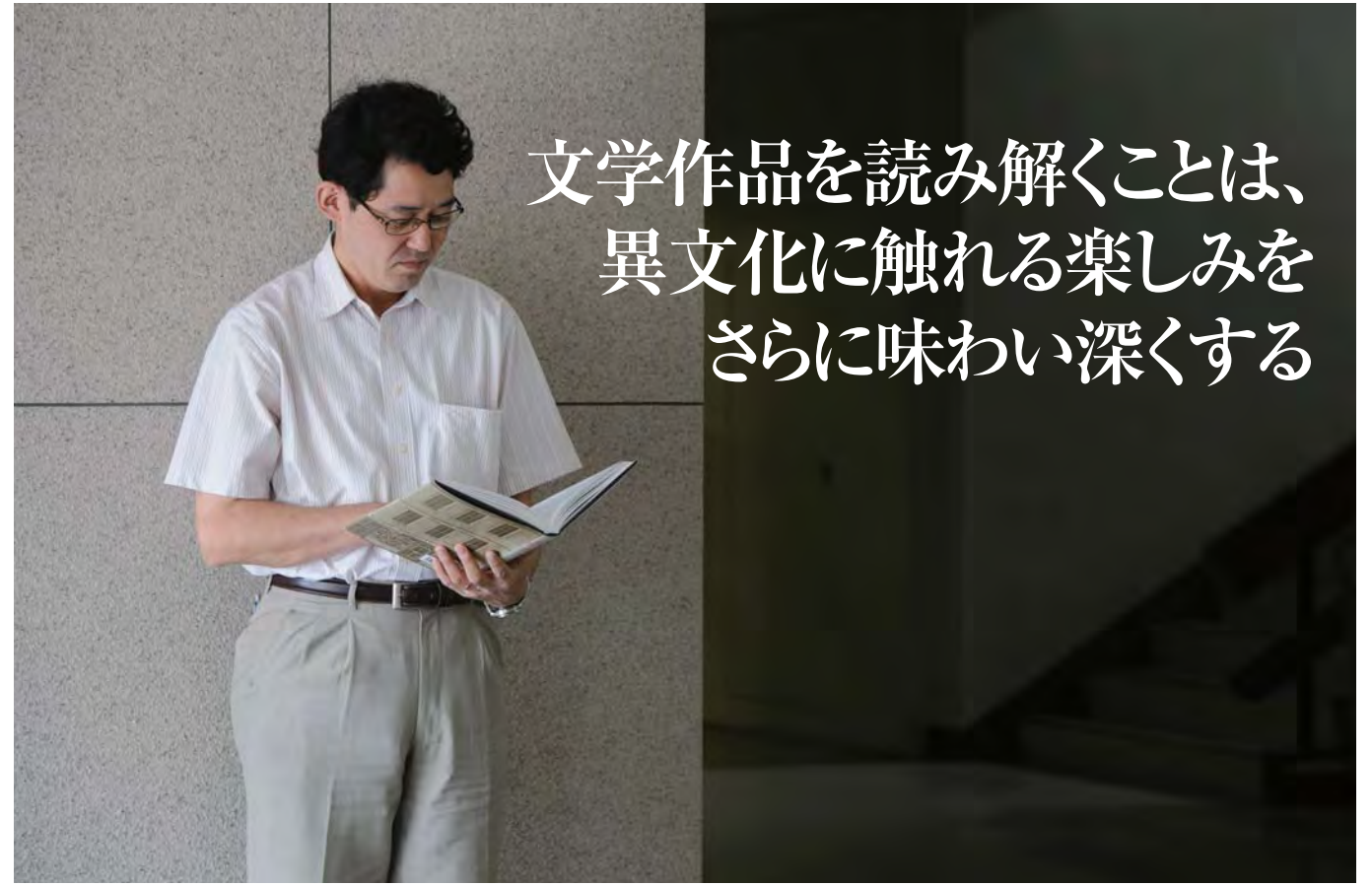
18世紀から19世紀の英国文学、特にロマン派詩人ウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth)を中心に、詩とその受容の研究をしています。

英語の世界に初めて触れたのは、小学5年生の時でした。父の仕事の都合で、アメリカ中西部のインディアナ州で1年間生活したのです。そこは日本人家族の少ない田舎町で日本人学校はなかったのですが、現地の学校に通いました。

初登校の日、英語を話せないのが不安

いっぱいの人に父は、「アイ・キャント・スピーク・イングリッシュ(I can't speak English)」といえば、だれも話しかけないよ。大丈夫」とニコリ言うので、その通りに話してみたら、怒涛の質問攻めっ！——片言でも英語を使っていたので矛盾していますし、相手も子どもでしたから(笑)。でも、すぐに「ヒデミは英語がわからない」と気がついて、気を使ってくれました。子どもの凄いいところは、日常の遊びと交流を通して大人よりもスムーズに言葉が理解できるようになっていくことですね。遊びや交流

文学作品を読み解くことは、異文化に触れる楽しみをさらに味わい深くする



夏休み、卒論に励む学生たちと文学を語る。

家エミリー・ブロンテの『嵐が丘』で、「英国文学にもここまで深いものがあるじゃないか」と感銘を受けたのを憶えています。現在研究している英詩の魅力を知るのは、その後の英詩の授業と卒論ゼミでした。

発信・交流型の異文化理解を

私の授業を受けている学生の多くは、将来、英語の教員になることを志しています。教科書ベースの英語の授業は、基本的に文法事項が中心になります。試験も

ありますから。文法事項は、英語を運用するために不可欠なことで、子どもたちの興味を長く維持することは容易ではないと思いますし、場合によっては文法嫌いから英語嫌いを生み出し、英語文化の世界の魅力を味わうチャンスを逸してしまうことにもなりえます。英語という言語の背景にあるもの、土台になっている文化的なもの、英語を使う人たちの生活文化、そういうものを認識しながら、英語を教える教員を育てたいです。小学校での英語教育が始まりますが、マザー・グースと児童文学の授業では、筆記試験の代わりに学生にマザー・グースを暗唱させています。また、グループで原書の一部を読んで訳して、気に入ったところや印象に残ったところを同級生に紹介するプレゼンテーション形式を取り入れた授業もあります。教員としての発表力を養えればと考えていますし、ストーリーの魅力とその背景にある異国の歴史・文化に気づくことで、自主的に文学を楽しむきっかけにもなると思って

います。

それに文学の知識には実用性もあります。たとえば新聞や広告、政治家のスピーチにも、文学はしばしば潜在するからです。ハムレット等のシェイクスピア作品の台詞や名詩の一行など、その知識の有無によって、記事や発言の理解の度合いも変わってくるものです。

外国の言語、文化、思想など、海外に視点を向けた大学の専門科目には、おのずと国際性が存在しています。英国文学を通じて、英国の文化、歴史、生活様式を学ぶことは、異文化理解につながります。そして、若い学生の皆さんには、知識をつめ込むだけでなく、その知識を糧にして、国際的な意見交換ができるようになってほしい。私も国際交流関係の委員を務めています。英国のグロスターシャー・コレッジ校への短期語学留学やスカイプを使った学生の国際対話などのプログラムを起点として、国際交流の機会を大学にもっと増やしていきたいです。

共同研究が大学を国際化する。

世界のなかで、日本は物価が高い国だ。平均的な留学生にとって、日本で学ぶことは楽ではない。言葉も、文化も。しかし、大学の共同研究で交わる多国籍の学生たちには言葉の壁も文化の壁も、大きな障害ではないかもしれない。森研究室で扱うのは化学式。数式は国際共通だ。記号を通じて、国際的な人的交流が広がり、研究の輪が広がる。世の中の発展に欠かせないのは、人とのつながりだとつくづく感じる。

森 聖治

Seiji Mori

理学部化学領域 教授

東京出身。1998年東京大学 理学系研究科博士課程化学専攻修了。博士(理学)。2000年から茨城大学理学部に勤務し、2012年、化学領域教授に就任。理論化学を駆使し、生体内の有機化合物や金属酵素の機能を解明するための基礎研究、有機金属反応機構の解析およびその知見を生かした新規反応、材料および触媒設計を2本柱として研究を行なっている。「人のやらないことを研究する」ことをモットーに、グローバルな視点に立って教育研究に取り組む。



初めて海外と接点を持ったのは、修士課程1年の1993年。卒業研究から博士号取得まで

化学研究の基礎を徹底的に鍛えていただいた東京工業大学理学部の中村栄一先生(現東京大学特例教授)の勧めで、米国アトランタのエモリー大学へ。ノーベル賞候補と評された理論化学者の諸熊奎治先生のもとで研究する機会を得たのです。大学には中国やロシアなどからも研究員が来ており、実に多国籍で刺激的でした。最先端の研究、他の研究者の考えを知ること、学ぶことは、みずからの研究に欠かせないことです。異文化体験やコミュニケーションのあり方も含めて、この留学経験が今の研究室の運営につながっています。

現在、茨城大学では東南アジアの大学と積極的に共同研究を行なっています。

私の研究室でも、タイの大学と共同研究や教育をしています。諸熊研究室に在籍していたときに訪問研究員としてタイから来られていた先生とのご縁で、2007年に初めてタイを訪れ、チュラロンコン大学(「タイの東大」と呼ばれる)とのつながりを持ちました。タイは親日的で、たいへんいい思い出になりました。そのことがきっかけでタイとの縁が生じました。2009年には「カセサート大学では、理論・計算化学の研究を行っている」と聞いて、再びタイを訪れることになりました。同大学のスパー・ハノンブア先

生(現在、理学部長)が私の研究に興味をもってくださり、翌年、カセサート大学から大学院生が2ヶ月間茨城大学に派遣されました。次いで、私の研究室からも修士課程の学生をカセサート大学のスバ先生のもとへ派遣し、相互に長期間滞在し合いながら、共同研究をする流れが生まれました。

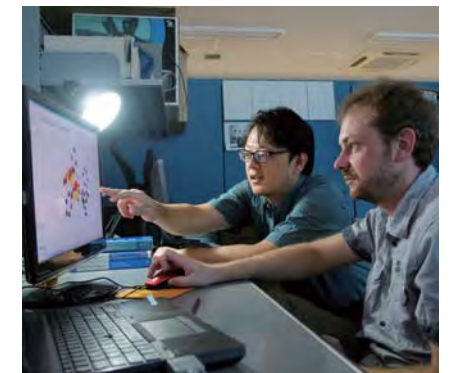
共同研究の内容は、ジャスモン酸という化合物が植物の中にある酵素によってどのようなメカニズムで合成されていくかをコンピュータを使って解明する研究でした。鉄を含むタンパク質の計算のやり方を私

茨城の地域で多様性を許容する文化をリードしていきたい



研究はうまく進むものです。大学が基幹となって旗を振るのもひとつの形ですが、カセサート大学とのケースは研究室レベルで生まれたものですから、人とのつながりを大事に育ててきました。そのつながりが、茨城大学が東京農工大学、首都大学東京とともに参画する「大学の世界展開力強化事業」(文部科学省)で、東南アジアからの参加大学の一つとして結びつきかけとなりました。

いろいろな先生方とのつながり、人のつながりがあって、研究や教育は広がるものです。水戸や茨城は、多国籍化にはまだまだ課題が多い地域ですが、一方で、自然豊かで優れた人材や先進的な産業が集積する地域でもあります。そういう環境に国際化という点で寄与することができるような大学でありたいし、そういう人材を育てていく大学でありたいです。大学ならではの草の根レベルの交流や、研究室レベル、学生レベルの交流から、多様性を許容する文化をリードするような機関に茨城大学がなることができればと願っています。



森研究室では、現在、ドイツからの博士研究員を迎えている。

たちの研究室が伝えましたが、一方、外国からの大学院生が滞在することで、研究室も活性化され、学生たちへのよい刺激になっています。欧米の大学へ留学する日本人は珍しくありませんが、東南アジアの大学では日本からの留学生はまだまだ少ないようで、スバ先生の研究室でも、「日本からの学生は初めてだ」とたいへん喜んでいただきました。タイの学生との共同研究の成果は、最近、学術誌論文に掲載されました。

共同研究は人のつながりで成り立つ

大学ではさまざまな研究がなされていますが、自分の研究室だけで解決しきれない課題はよくあるものです。こちらの行

なっている研究に興味をもってくれる研究室に助けを求める一方、こちらの持っている知識や技術で他の研究室を助けることもあります。学内や国内の場合もあれば、海外に飛び出すことも。大学の中にこうした共同研究の場がたくさんあるのは、大学の活力を増すことにつながりますし、海外との共同研究が増えることは大学の国際化につながることもなります。

日本は昔から資源を輸入してモノを作って輸出して生きている国です。将来、少子化が進むことで社会構造が変わり、日本そして大学はこれからますますグローバル化することは避けられないでしょう。

そこで欠かせないのが人的交流。現地に行って、その土地の状況を見て、それに関わる人々と知り合って初めて、共同

CAMPUS VIEW rediscovered

温故知新、大学の未来が見えてくる

茨城の最高学府として、県下最初の総合大学として建学された茨城大学。以後、今日まで、国と地域に尽力する人材を送り続けて65年の歳月が流れる。そのいとなみは未来永劫、発展と成長を続けていくことであろう。



水戸キャンパスの光景



2014年春に改修された新しい大学図書館(水戸キャンパス)

水戸から日本へ、そして世界へ

茨城大学のある水戸の地では、今も「サンナナ」の響きを懐かしみ、この大学の風景にみずからの思いを重ね合わせる人は少なくない。「サンナナ」とは、陸軍歩兵第二連隊・東部第三七部隊の兵舎。旧軍建物が戦災校等に転用されることになり、水戸空襲で校舎を失った市内の各学校は、軍隊が解散して空家となった三七兵舎へ移転



大学本部を望む

した。焼け野原から集まった児童・生徒たちが戦後の荒廃から未来を夢見て勉学を再開したこの地が、現在の茨城大学の水戸キャンパスである。軍用地から文教の地へ。この地は、新しい時代の象徴でもあった。

1949年(昭和24年)、茨城大学は、旧制水戸高等学校、多賀工業専門学校、およ



図書館閲覧室玄関

び茨城師範学校・茨城青年師範学校を包括し、文理学部・教育学部・工学部の3学部からなる新制大学として発足した。

学生募集の新聞広告は同年5月に出され、入試は6月15日から実施。数学と国語など学科試験と身体検査が課せられた。募集人数は文理学部160名、工学部200名、教育学部660名。合格発表は26日、入学式は7月20日だった。鈴木京平初代学長の挨拶は「個性を伸ばし、ambitiousなれ」――。猛暑の夏、653名の一期生が聴き入った。

授業は8月開講。旧兵舎六棟中二棟が



大学正門を望む

まず改修され、「4号館」「5号館」となっていた。壁にはまだ銃架が残りサンナナ時代の面影を留めていたという。米不足のなかで、茨城一号と呼ばれたさつまいもが教職員や学生の糧となった。冬には、校庭の陽だまりで円陣を作って教授を囲み、講義を受ける学生たちの姿もあったとか。物資は乏しくても、戦中の思想統制から解放され、将来に希望を持てる喜びがキャンパスに溢れていた。翌1950年10月には「開学祭」と銘打って、新装の本部前で晴れて開学式典が行われた。

式典での鈴木初代学長の式辞に、創設



大学本部

時の決意がうかがえる。「本部の新築も…新制大学の本部としては、おそらく日本でありましょ。只今、建築中のあの図書館も、…、日本一となりましょ。…日本の教育文化の一中心地として、我国の文化史上に、一異彩を放った、由緒あるこの茨城の地に、再び、今度は、新しい茨城文化の華を咲かせなければならぬと、堅く決意いたすものでございます」

地域社会の期待も大きかった。常陽銀行頭取の亀山甚氏は、私財を投じて大学敷地内に経済研究所を建て寄贈(常陽経済研究室)。茨城鉄道(1927年～71年:赤



5号館

塚駅―御前山駅間)は学生の交通手段を確保すべく、1951年12月に「大学前」駅を新設し、常磐線赤塚駅からの電車直通運転を実現した。

経済成長期の訪れとともに、大学は拡張と整備を進めて発展していく。1952年、茨城県立農科大学が合併し、農学部が新設される。北西隅に建つ講堂は創立10周年記念事業のひとつとして具体化され(竣工は1966年3月)、1965年には学生会館として茨苑会館が完成した。文理学部は旧制水戸高等学校を継承して、文学科、理学科、および政経学科の3学科で構



6号館

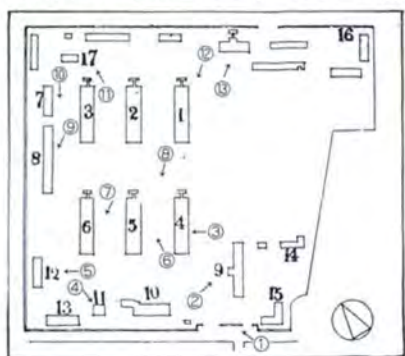


人文学部棟(左上)・大学図書館(左下)・教育学部棟の中庭(右上)・理学部棟(右下)

成されていたが、1967年に「人文学部」「理学部」、一般教養課程が分離独立して「教養部」となる。高度経済成長とともに就職あっせんも安定して発展し、卒業生の進路も順調に拡大していった。

70年代は大学紛争の時代。茨城大学も、茨苑会館の利用や運営を巡っての対立や、学生寮をめぐる紛争、教養部・農

茨城大学現有施設図(水戸市外遊里町 1/3000)



1. 一 号 館	2. 教 養 部 館	13. 教 養 部 館
2. 二 号 館	3. 理 学 部 館	14. 理 学 部 館
3. 三 号 館	4. 理 学 部 館	15. 理 学 部 館
4. 四 号 館	5. 理 学 部 館	16. 理 学 部 館
5. 五 号 館	6. 理 学 部 館	17. 理 学 部 館
6. 六 号 館	7. 理 学 部 館	

以前の茨城大学施設図

学部封鎖問題、大学臨時措置法反対運動などで揺れ、その後の大学改革の方向を模索する時期に直面する。経済大国として国際社会での評価が高まるなかで、1968年の工学研究科(修士課程)を筆頭に、70年代から90年代初頭にかけて5学部すべてに大学院が設けられた。附属図書館や各学部の校舎の改築・増築も進行した。

国公立大学の入試に共通一次試験が導入され、進学世代が急増するのは、80年代。大学の国際化が話題になり始めたのもこの頃で、茨城大学では比較的早い段階から積極的にアジアからの留学生を



上水戸駅構内

受け入れてきた。私費外国人留学生特別選抜は1983年度に工学部からスタートし、相次いで他学部でも受け入れが始まった。1990年度には初めて100名を突破した。

1996年に教養部が廃止され、2004年には国立大学の法人化に伴い、国立大学法人茨城大学となった。

創立から65年を迎え、水戸キャンパス正門の前の改修・増設された図書館が真新しい。大学は生き続ける。育ち、発展し、拡大しながら。それぞれの時代に学生生活を謳歌した先人たちに思いを馳せながら、あらためてキャンパスを散策してみたい。



袴塚通り(水戸市)



日立キャンパス・工学部(上)・阿見キャンパス・農学部(下)

日立の風とともに、阿見の空のもとで

1939年(昭和14年)に日立製作所と茨城県の協力で設置された多賀高等工業学校は、多賀工業専門学校と改称、戦後日本の復興に大きな役割を果たした技術者たちを数多く輩出した。工学部はこの多賀工業専門学校を前身とし、1949年、茨城大学設立時に発足した。太平洋に近いキャンパスを歩くと、図書館、IT基盤センター、社会連携センター日立分室など、ものづくりの精神と最先端の学術研究の香りを感ずる。



水力学実験室(工学部)

工学部は、日本の高度成長とともに発展・拡充し、高い技術力を求める日本社会のニーズに常に応えてきた。現在、学部は8学科を有し、日立製作所を始めとする地元関連企業と連携した実践力のある高度技術者を養成する教育を行なっている。

農学部の前身は県下初の旧制大学・霞ヶ浦農科大学(1950年茨城県立農科大学へ)。かつてドイツの巨大飛行船ツェッペリン号が飛来してその機体を休めたこの地で、農学部は日本の農業振興を担ってき



第一機械工場(工学部)

た。正門から中庭へ入ると、風になびく稲穂が目に入る。ビニール袋に入った植物を研究室へ運ぶ学生もいる。長靴姿が新鮮だ。ビニールハウス、牛舎、果実園、温室、実験棟では遺伝子実験、微生物研究など、さまざまな「生きものたち」と研究に向き合う場がここにある。長閑な青空のもとで、阿見キャンパスは「現地整備か」「水戸移転か」で揺れた時代もあった。現在では主要建物の整備が済み、学部の再編強化に取り組みながら、「持続可能な社会と環境保全の担い手」の教育に力を入れる。

参考資料: 堀口正一「茨城大学創立期 第一回生の記録」、茨城大学「茨城大学50年史」



農業部



バスケットボール、広告代理店、ニューヨーク 人生をデザインする面白さ、感じて

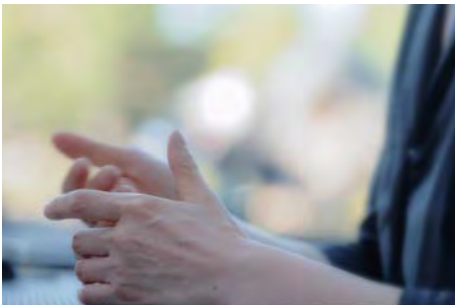
学生時代と東京での社会人時代が成長期、ニューヨークはキャリアを積み重ねた時代。そして、今、自分が培った経験、見えた世界を活かし、アートを通してさまざまな世代に役立ちたいと、模索・活動中

エバタ・マサコ

ビジュアル・デザイナー
イラストレーター
アート・エドューケーター

えばた まさこ

1962年水戸市生まれ。1985年教育学部美術科卒業。東京の大手広告代理店を経て留学のため渡米。1991年ニューヨークのスクール・オブ・ビジュアル・アーツ大学大学院イラストレーション・アズ・ビジュアル・エッセイ科修了。アメリカの由緒あるイラストレーション年鑑「American Illustration」にたびたび入選。NYを拠点に種々のグラフィック作品や絵本の制作、装丁などビジュアル・デザインの第一線で活躍。現在、創作活動に加え、表現アートプログラム「Artology(アートロジ)」主催、アート教育の分野でも、興味と好奇心の赴くままに挑戦を続ける。



世に残る作品を手がけたい

ニューヨークから20余年ぶりに帰国したビジュアル・デザイナーのエバタは、現在、東京を拠点に活躍する。教育学部美術科卒が今になって功を奏し、高校で美術の授業を担当する機会を得た。「高校生は自由と不自由の狭間で揺れる時期。表現アート体験で潜在する創造力を引き出したいと考えています」と語る。

小学2年の授業で花の絵を描き、水戸市のコンクールで銀賞を受賞して以来、図画の時間が好きになった。思春期に打ち込んだのはバスケットボール。高校時代は特に厳しい練習に明け暮れ、国体の茨城県代表チームに選抜された。一方で、美

術の授業や校内出版などの創作活動も好きだった。いくつかの私立大学からスポーツ推薦枠のオファーもあったが、「一生続けるなら」と美術を選んだ。しかし、大学でもバスケットボールの比重が高く、授業の課題はいつも「期限ギリギリ」で提出した。

就職活動の時期になり、ラグビーとバスケット両部の顧問だった体育科の教授が、デザインの仕事の選択肢として広告代理店の存在を教えてくれた。具体的な仕事内容もよくわからないまま、デザインができるならとアプラインした。最大手の広告代理店に就職が決まり、東京での生活が始まった。

時代はバブルの真っ只中、業界全体が華々しい時代だった。日産の新型スカイラ

イン、資生堂の「エクボ」「ピンポンパンツ」など全国展開の広告キャンペーンを担当した。

「ところが、3年くらい経つと、本当にこれでいいのかなと思い始めて。毎日午前2時、3時まで仕事をして、広告の寿命は3か月くらい。もっと長く世に残る作品を手がけたいと思うようになりました」。

心が他の環境を模索し始めたとき、大学4年の夏休みに2日間だけ滞在したNYで「住んでみたい」と想った記憶が強く蘇ってきた。「今しかない」と留学を決意した。

NYのスクール・オブ・ビジュアル・アーツ大学の大学院に1989年9月に入学。師事したのは、1960年代以降最も才能のあるイラストレーターの一人と謳われたポール・

デビス氏だった。

創ったもので勝負する

大学院の油絵の授業に、丸坊主の男性がモデルで現れた。白いワイシャツを着て、ツルツルの美しい形の頭が印象的だった。「エッグスタンドの卵みたい」と思い、帰宅後、二者を比較する絵を即興的に描いた。その作品が由緒あるイラストレーション年鑑「American Illustration」に入選した。1991年に始まった湾岸戦争とメディアとの関係をテーマにした卒業制作も同年鑑に入選。発行と同時に全米から仕事の依頼が舞い込み始めた。

「作品に力を注がず、言葉で説き伏せようとするクリエイターが意外にも多いので

Alumni Masako Ebata



恩師のポール・デビス氏と。

す。私は" 創ったもの" で勝負します」。

『1Q84』など村上春樹作品のアメリカ版の表紙制作などでも知られる装丁家の巨匠チップ・キッド氏とのコラボもエキサイティングな思い出のひとつだ。ある本でキッドがカバーを、エバタは本文と扉などのデザインを担当した。

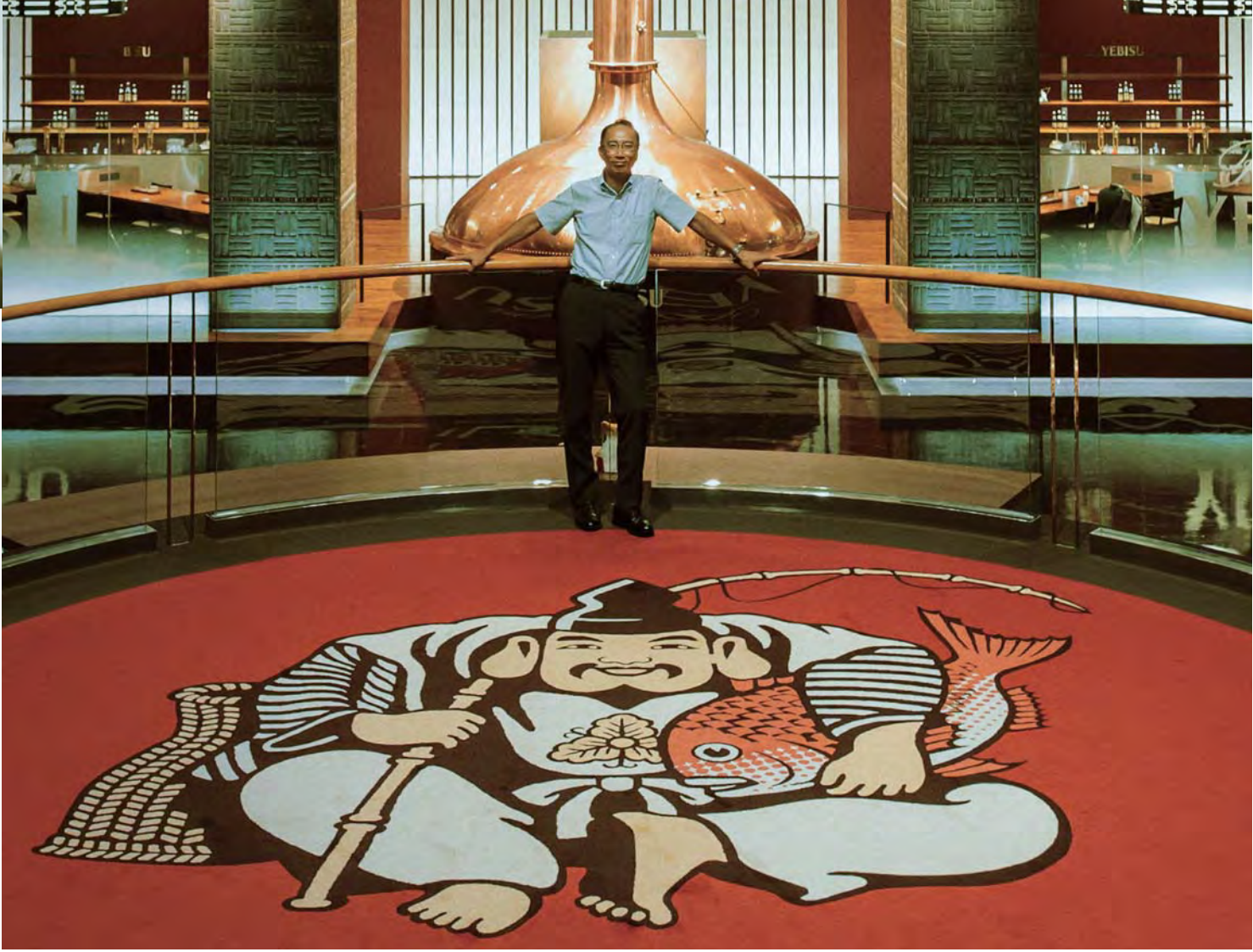
「輝いている人はみな創造力豊かなんです」とエバタは言う。NYであったからこそその出会いを通して、芸術系に限らず、すべての人の営みにおいて「創造力」の重要性を実感した。

あの9月11日、世界貿易センタービルの崩落を2キロほど離れたスタジオのビルの屋上で目の当たりにした。はじめはテロとは知らず、あまりにも現実離れた光景をどう捉えていいのかわからなかった。そこにあった高いビルが噴煙に吞み込まれるように見えなくなっていった。途端に泣き出すアメリカ人たちの姿を見て、ふと思った、「私は外国人なんだ」——。

□ □

数年前から、また、心が動き出した。自身の経験から得たことを活かし、さまざまな世代の方々の創造力を呼び覚ますような" 楽しい" アート教育を日本で展開できないか——。研究と研修を重ね、2010年、表現アートプログラム「Artology(アートロジ)」を発足した。今秋は、展覧会出展のため、ロンドンやNYにも赴き、制作と教育の融合世界で活動が続ける。

「大学生には、短い期間でも海外に住んで、自分の世界を外から見てほしいです。気付かなかった何かが見えるかも……」。



今日の責任、明日の未来は、自分が決める。 そこから零が1に近づく。

大学時代に礎を築いた「オンリーワン」の価値観が、開拓精神を重んじる企業で花咲き、世界に誇る「オンリーワン」の旨いビールを売り込む。メイド・イン・サッポロの味だ。大学時代の仲間と味わった一杯の旨さが鮮る。

松田正哉

サッポロビール株式会社
首都圏本部
広域外食統括部 担当部長

まつだ まさや

1962年東京都生まれ。1986年、文学部卒業後、サッポロビールに入社。関東支社山梨担当、大阪支社大阪南支店、埼玉支店、中四国本部、広域営業本部を経て現職。本年、新設された創造変革職に任命され会社全体の【創造と変革】【越境】の推進にチャレンジしている。

「今の会社が好きなのは、自由にいろいろなことをやらせてくれること。やりたい、といえば、じゃ、やってみたら、と意外に権限をくれる会社。身近な自分の限界や壁を崩せ、そういうところが自分に合っているという気がしますね」(松田)



学生時代を 本音で本気で走り抜けた

松田正哉は、少し照れくさそうに、学生時代を振り返る。

「やんちゃな学生だったんですよ。よく事務の方々や教授に怒られましたね(笑)」。

出身は東京。浪人して茨城大学へ入学した。国公立大学で地方へ行くくらいなら、早稲田や慶応など都内の私大へ進学する、そういう時代に水戸での学生生活を選んだ。なまりのある土地柄に、「話し方も、服装も、価値観も、ずいぶん違っていた」と、松田は懐かしむ。バイクや車を乗り回し、講義室の近くに駐車して、そのまま授業へ。授業中に入っていっては、教授に叱られ

たものだ。

「今、振り返ると、ずいぶん突っ張ってたなと思いますよ。実力もないのに、『やらせたら、できるよ』と、ちょっと斜に構えたりしているところがありましたね」。

都内で学生生活を過ごす旧友たちとはひと味違った学生生活を築いてやる、そんな男の意地を松田の回顧に感じながら、ふと、気がついた。松田の意地は、茨大入学から始まったのではなく、きっと進学するずっと前から身体の中で育まれたオンリーワンの美学ゆえではなからうか、と。

自分に正直に生きていた学生時代だった。「今日の責任は俺にあって、明日のことは俺が決める…そんな風に、『ひとりでも

生きていける』という土台を築いた時期でもありましたね」。

仲間作りを大事にしたという。全国から集まった同期生や先輩、後輩。ノックもせず、プライベートなんてありやしない。今どきのセキュリティなど無縁の時代だ。部屋をたずねると、そのまま、友だちの生活がダイレクトに伝わってくる。ここから世の中と多様な価値観を見つめていった。

「育ちも違うし、考えも違う、年齢も価値観も違う人間たちと本音で付き合えるのが本当に面白くて楽しくて。毎日がわくわくするような、そんな4年間でした」。

五感で感じる習慣を 大学時代に身につけた

就職活動は、「売上高5000億円以下の企業は受けない」と決めた。航空会社や建設会社、金融企業等、様々な業界にチャレンジした。飛び込みで志願した企業

もあるという。

「無謀ですよ(笑)。『俺をとらなかったら、損だよ』って、そんな感じでした。『不採用』という通知を見て、担当者に関わせたことも(笑)。でも、面接は本当に楽しくて。同じ面接を待つ学生たちが緊張している姿を見て、子どもに見えたものでした」。

今以上に、大学の名前が幅を利かせた時代だ。しかし、社会人としてスタートラインに立つとき、学歴や肩書きではなく、素っ裸の自分で勝負したい。そんな挑戦心と期待感とともに、「男は黙って…」どころか、みずからの人生観を大いに語って、松田はサッポロビールに入社する。1986年。国際舞台のさまざまな分野で広く、日本が頭角を現わし始めた頃である。

ビールは、もともとグローバルな商品だ。サッポロビールは、今や北米でもっとも認知度の高い銘柄。2006年にはカナダの高

級ビール「スリーマン社」を買収した。2011年には日本のビールメーカーとして初めてベトナムに工場を竣工し、東南アジアでの市場拡大も積極的に進めている。

松田は国内営業に従事する立場だが、入社当時、ここまで海外進出する未来を想像できなかったという。

「当時の日本のビールの国内生産量は5億5千万ケース。麒麟ビールに次いで国内シェア第2位でした。国内市場が徐々に縮小して、今ではおよそ4億3千万ケース。海外展開は必然的に重要になっています」。

厳しい時代の中で、松田が心がけるのは、常に感性を持つこと。五感で感じる習慣は、大学時代に養った大きな財産の一つである。

「零のものを1に近づけたい。零のものをどうプラスにするかを考える。売るのはなくて、売れるようにすること。それが私の仕事です」。



国際化とは、相手を認識して尊重し、一緒に未来を見つけて取り組むこと。

「大学生活で人生は180度変わったと思います」と久野は振り返る。ベトナムへの留学がそのきっかけだった。日本とベトナム。発展する友好関係を人材教育で支えている。

久野恵子

ESUHAI Co., Ltd
顧客開拓・サポートチーム
書類申請業務担当

ひさの けいこ
1984年北海道生まれ。2008年人文学部卒業。
在学中1年間ベトナム・ハノイで交換留学生として
ベトナム語を学んだ経験を持つ。大学卒業後日本
の研修生受入れ団体での2年半の勤務の後、
ベトナムへ。顧客開拓・サポートチームに所属。各
種申請書等法務書類の作成や社内通訳をはじめ、
両国文化の理解とベトナム語の語学力を活か
して、日越社員および日越両事務所を両輪とする
友好関係の主軸をなす。



ベトナムの若者を 日本の企業へ橋渡しする

昨年、ベトナムと日本は外交関係樹立40周年を迎えた。年明けに東南アジアを公式訪問した安倍晋三首相は、ベトナムを最初の訪問国として選び、「21世紀の発展の中心となる国」と印象付けた。日越間の経済関係が重要視され、日本企業のベトナムへの進出が増える一方で、ベトナムの若い人材のなかには、日本の企業やベトナムの日系企業へ熱い視線を向ける者は多い。久野恵子は、そんなベトナムの若者たちの期待を担っている。

久野は、日本ででの就労を目的とするベトナム人に日本語やビジネスマインドなどを教育し、日本企業に紹介・派遣する現地企業に

勤める。理系大卒のエンジニアや管理業務、貿易業務、外国語などに通じた人材を、日本企業やベトナム国内の日系企業に派遣する。また、ベトナム進出を検討する日本企業への支援や、日本企業との取引を希望するベトナム企業へのサポートなど、日本企業とベトナム人の橋渡しに努める。

同社との出会いは、意外なものだった。「就職活動のとき、ある会社から内定をいただいたのですが、ベトナムに関わる仕事に就きたいという思いが捨てきれず、辞退しました。すると、その会社の人事の方が、『ここを訪ねてみなさい』と今の会社の社長の連絡先を教えてくださいました」

同法人の日本事務所では2年半ほど働き、ホーチミンに異動。今年の秋で4年になる。

実習生の頑張りがやりがいい

久野にとって、大学生活は決して澁刺したものではなかった。

「授業こそきちんと受けるものの、バイトするでもなく、サークル活動は幽霊部員。出身が北海道なので、水戸に友だちはだれもいません。学校と家を往復するだけの、冴えない学生生活でしたね」。

ある日、学部の掲示板でベトナムへの交換留学生募集の張り紙を目にした。大学生活はここからスタートする。「これだ!」と思った日から2か月後、久野はハノイにいた。

どんな国なのか、何を食べるのかどこから「こんにちは」「ありがとう」の挨拶さえ知らぬまま異文化の世界へと飛び込んだ。待っていたのは、想像を超えたカルチャーショックだった。道を埋め尽くすバイク、清潔とは思えない食品を並べた市場のありさま、物乞いをする子どもたち……。とりわけ、閉口したのは

犬の姿焼きだった。

「水は午後5時から1時間しか出ないんです。部屋に貯水タンクがあって、1日に使用する水をその1時間で貯めなければなりません。タンクの栓を開けないと水は貯められず、満杯になったら栓を閉じないとあふれてしまいます。おかげで、必ず5時には帰宅しなければなりませんでした」。

驚きと不安の「環境の変化」のなかでも、久野は意図的に日本人の友だちとの距離を置き、現地での人間関係を築いていった。ベトナム人の女性とルームシェアをしたり、大学にある日本語センターでベトナム人学生の会話の授業を手伝ったりした。

一方で、「外国人」としての日本人を意識することもあった。同じ日本人として恥ずかしいと感じる一部の日本人観光客たちの振る舞いを目にもすることもあった。海外でどう振る舞うべきか、自分が外国人であることを自覚する意味でも、留学はいい経験になった。

現地での生活に限界を感じたことは、なかったという。

「まわりにいた、たくさんのベトナム人が助けてくれたからです。知らない道行く人までも、みんな明るいですから、落ち込んだ時なども、励まされたりしました。あとは、ベトナム料理が美味しかったからかな(笑)」。

日本で働きたい、日系企業で自分の能力を活かしたい……そんなベトナムの若者の夢を叶える今の仕事は、久野の恩返しなのかもしれない。関わった実習生たちの頑張りは久野にとってこの仕事のやりがいでもある。久野を慕い、結婚式に招待する実習生もいる。実習生たちもまた、久野への恩を忘れない。

国際化とは、「相手を認識して尊重し、新しいやり方や方法と一緒に見つけて取り組んでいくこと」と久野は語る。夢は、越日・日越辞書を作ること。茨城大学のキャンパスを久野の辞書を持ったベトナム留学生が闊歩する、そんな日が待ち遠しい。

Alumni
Keiko Hisano



Meeting the Students

日本で、インドネシアで、異文化理解

留学は、海外での生活を体験できる貴重な機会だ。留学を経験して、その後の人生が変わる学生は、少なくない。言葉の通じない異国で、馴染みのない生活習慣に自分の身を投じるとき、若者は「国際化」の意味を悟る。協定校への交換留学制度でつながったインドネシア・日本双方の地での互いの異文化経験を語る友人たち。ふたりもまた「国際化」を体現した学生たちである。

Tina Nurtina & Yoshie Kobayashi

ティナ・ヌルティナ

小林芳江

ティナ・ヌルティナ
1993年インドネシア・Sukabumi生まれ。2011年MAN 1 KOTA SUKABUMI高校を経て、インドネシア教育大学日本語教育学科へ。日本語と日本の文化に興味を持つ。

小林芳江
1992年 茨城県生まれ。水城高等学校卒業後、2011年教育学部情報文化課程社会文化コースに入学。趣味は写真・音楽鑑賞・読書など。

小林:ティナさんの在籍するインドネシア教育大学に、交換留学生として、去年の9月から10か月間、留学していました。入学した時から海外の大学へ行きたいと思っていたので満足しています。インドネシアについての知識はほとんどありませんでした。「大丈夫かな」とちょっと心配しましたが、こちらで知り合ったインドネシアからの留学生が向こうにいるので「なんとか、な

はぐっすり」という感じでした。

最初のセメスターはインドネシア語のクラスと、日本語教育学科のクラスを聴講しながら学生の日本語の課題を手伝ったりしていました。日本語を勉強している学生が思った以上に多いのに驚きました。ティナの宿題も手伝ったね。図書室でいっぱいしゃべりました。次の学期はインドネシア語とインドネシアの踊りと音楽の授業。そし

ア語を使うしかありません。だんだん、友だちの家族などのインドネシアの人たちとインドネシア語で交流を持てるようになったのは嬉しかったですね。自分の変化を実感できました。

カルチャーショックは、宗教でしたね。イスラム教の人がほとんどなので、街の生活はイスラム教の教えに則ってまわっています。とにかく、朝が早い(笑)。大学の授業は7時から。お祈りの時間が朝4時。慣れればいだけなのですが、最初はびっくりしました。宗教行事が多かったですね。そして、「ゴム時間」の文化(インドネシア語でjam karetといい、時間が伸び縮みするイメージ)。待ち合わせの時間に来ない!

留学前は、馴染みない文化とどう関わっていいかわかりませんでしたが、今は適切な振る舞いがちょっと身についた気がします。特にインドネシアの学生とだと、自然な交流ができるのが嬉しいです。

Tina:ゴム時間では、日本人の留学生を待たせてしまって、いつも申し訳なく思っていました。日本に来て、日本の時間の感覚に慣れてきて、時間に合わせる習慣が身に付きましたね。

日本語を習い始めたのは高校生のとき

いい国だなと思いました。夏ですか。日本の夏のほうが暑いです。大学のある街はすごく涼しくて、山の麓にキャンパスがあるので。だから、ちょっと日本の夏は辛いですね(笑)。

母国の大学の学科では、日本語の会

帰国までに論文を書くこと。そのための調査をしたい。そして、いつか北海道に行ってみたいです。

ティナ・ヌルティナ

から。インドネシア教育大学では日本語教育学科に所属しています。ですから、日本に留学するのが夢でした。アニメやコスプレなど日本の若者文化に興味を持つ若者がインドネシアにはたくさんいます。私も書道や日本のドラマが大好きです。ドラマも映画もインターネットで簡単にダウンロードできます。

日本には春に着きましたが、桜の季節が美しく、でもちょっと寒かったかな。空気がきれいで、ごみもなく、思っていた通り

話や読解、漢字、日本事情などを学んでいます。茨城大学では日本の文化や異文化コミュニケーションの授業などを取っています。専門用語がいっぱい出てくるので、たいへんです。他にも、いろんな国から留学生が来て勉強しているので、こんな異文化交流ができるのは予想外で嬉しかったです。

キャンパスでの生活には慣れましたが、キャンパスの外ではまだ慣れないことも多くて、特に、ジルバブ(jilbab)が珍しいの

か、不思議そうな目で見られるのが、ちょっと困ります。服装もイスラムの文化として、自然に受け入れてもらえたらと思います。飲み会には行けない、アルコールは飲めない、豚肉は食べられない、そんな文化を理解してもらえたら嬉しいです。

この大学の学生はみんな親切にしてくれるので、不安に感じることはほとんどありません。ただ、やっぱり、ひとりになると淋しくはなりますね。だから、芳江が帰国して久々に会えたときは、本当に心強かったです。「日本語、上手になったね!」と褒められたのは嬉しかったです。

限られた時間の中での滞在ですが、ここでの経験は、インドネシアに帰ったら、他の学生たちとシェアしたいです。彼らのための勉強になってほしいから。これからもインドネシアの学生がもっともっと日本に留学すればもっともっと素敵だろうなと思っています。



Meeting the Students

留学は、やさしく世界への扉を開く教育制度

水戸キャンパス近くにある留学生の寮「国際交流会館」では現在68人の留学生が生活をしている。同会館で留学生を支援するチューターを務める玉造さんと寮生のルーシーさんが、互いの留学体験を語る。2人の体験から見てきたのは、留学は異文化理解の入口ということ。その先に多くの出会いや交流が広がっている。

Hatsune Tamatsukuri & Lucie Towers

玉造初音

ルーシー・タワーズ

玉造初音
1993年牛久市生まれ。茨城県立竹園高等学校を経て、人文学部人文コミュニケーション学科に入学(2011年)。サークルは大道芸サークル スウェット組合。趣味はおいしいものを食べることで料理。

ルーシー・タワーズ
1991年豪シドニー生まれ。Randwick Girls High School在学中に、宇都宮文星女子高校へ長期留学(2010年)。2011年にシドニー工科大学に入学。趣味はストーリーを読んだり書いたりすること、ライブ音楽、アート、アニメーションなど。

初音:ルーシーは日本に来て、どのくらいになるの?

Lucie:今年の4月に来たの。いろいろな国からの留学生が来ていて交流できるし、自然な日本語に毎日触れられるのが嬉しいね。

初音:日本語はいつから勉強しているの?

Lucie:5年前、高校生のときから。映像

Lucie:交換留学だったの?

初音:そう。釜山の仁済大学校というところに。韓国の生の姿を見ながら、いい思い出をいっぱい作ることができたと思うよ。1週間一人旅をしたときもあって。旅先で出会った韓国の人たちはみんな優しく、ご馳走になったご飯が美味しかったなあ。

Lucie:ホームステイだったの?

キャンパスから一歩出ると、冒険の連続。でも、間違いも学びの一部だと思っています。

ルーシー・タワーズ

制作の授業を取っていて、日本にはいいビジュアル・カルチャーがあるでしょ。そこに興味を持ったの。初音は、どこかに留学したこと、ある?

初音:韓国に半年ほど。K-POPや韓国ドラマ以外の、もっと身近な文化を知りたかったの。韓国人の友だちもいるので、安心して行けたのね。

初音:ううん、学校の寮に住んだの。ルーシーも住んでいる国際交流会館みたいなところ。

Lucie:同じアジアの国だし、日本人と韓国人、見分けはつかないでしょ。

初音:それが驚いたことに、そうでもないの。服装とか、何か雰囲気が違うのかな。「日本人でしょ?」と声をかけられたことも

あったよ(笑)。その点、ルーシーは日本人とは間違えられないよね。

Lucie:結構慣れたけど(笑)、たとえば、スーパーとかに行って、「すみません」と日本語で声をかけても、「すみません!英語、話せません」ってびっくりされたりする。日本語で聞いたのに(笑)。

初音:日本での学校生活は、ずいぶん違う?オーストラリアの学校とは。

Lucie:先輩と後輩の関係や、先生と学生の関係はぜんぜん違うね。オーストラリアではもう少しリラックスした関係だし、先生のことは時々下の名前で呼ぶけど、日本では“玉造先生”でしょ(笑)。「です」「ます」を使わなければならない。いつ、どんなときに「です」「ます」を使うべきか、外国の人はよく困るのよ。それからオーストラリアではダイレクトに物事を伝えるけど、日本ではその場の空気を読んで話すでしょ。空気を読めないときはたいへんだよ(笑)。

初音:学生の違いはある?

Lucie:日本人の学生は静かだね。相手のことを考えてくれる。オーストラリアのほうが授業はにぎやかかな。ディスカッションなどもあるし、自分の意見をはっきり言うから。日本の大学生はよく考えてから話

留学では直接現地の人と話ができたり、同じ世代の学生と知り合えるのがいい。

玉造 初音

をするので、私は好き。先生のことを尊敬しているところも、いいと思うよ。

初音:部活とかは、あるの?

Lucie:日本ほど盛んじゃないけど、マンガ・サークルとかオーストラリアにもあるよ。でも、もっと政治的なサークルが多いかな。

初音:キャンパスの外へはよく遊びに行くの?

Lucie:もちろん、大好きだよ。冒険でもあるけど、間違いも学びの一部だと思って。大学の中のほうが、気持ちは楽だね。

初音:交換留学って、いい制度だね。

Lucie:日本語を学ぶことができる、友だちを作ることができる、その友だちがいれば、また安心して日本に来ることができる。それに一度海外の経験をする、違う国やその文化圏に行くことが楽になる

よね。自分の世界に閉じこもらずに、違う世界を経験するべきだね。

初音:留学すると、直接現地の人と話しいい機会がたくさんあるでしょ。大学だから、同じ世代の学生と知り合えるのもいいよね。他の国からの留学生と知り合えるのも魅力的だし。

Lucie:そうそう、街で明らかに外国人という人に英語で話しかけたら、日本語で「おお、英語は話せません。ブラジル人です」って(笑)。外国人ふたりが日本語で

話しながら街を歩くという面白い光景になっちゃった。

初音:私もあるよ(笑)。留学中に、韓国語は話せないけど、日本語が話せるカザフスタンの留学生と友だちになったの。釜山で日本語を話しながらウズベキスタン料理を食べるという奇妙なひとときになって(笑)。留学という制度があったからこそその光景だよな。

Lucie:留学を通じて、他の文化に興味を持つのは素敵だよな。相手の国のことを知っていくうちに、自分の国を再発見できたりするし。留学はそういうきっかけになる貴重な機会だと思うよ。

初音:私自身、そういう経験ができたのはよかったよ。だから、今、(国際交流)会館でチューターをしていて楽しいし、ルーシーともこうして話ができるし…。これからもいい友だちでいようね。

ルーシー:イエス!



八若壽美子

Sumiko Hachiwaka

教授

大学生活の中に留学という
選択肢があることを知ってもらいたいです。
池田 庸子

大学の特性を活かしつつ、生涯の財産になる
留学生活ができるよう環境を整えたい。
八若 壽美子



池田庸子

Yoko Ikeda

教授

留学生たちの多くは、留学先の大学や地域を通して、「日本」を感じ、経験していく。留学生センターも、大学の特性や地域色を取り入れながら、ここでしかできない日本留学体験を最大限に提供したいと考える。

現在3キャンパス合わせて、23か国から287名の留学生が学んでいる。海外の協定校は39校(2014年9月現在)で、米国、カナダ、オーストラリアなどの英語圏、中国や韓国、台湾、インドネシア、タイなどのアジア圏などから交換留学生が集まり、日本での交流の輪を広げる。

留学生センターは、日本語・日本事情教育(留学生対象)、日本語教師養成の授業、異文化理解教育(日本人学生対象)を行なうとともに、留学生が学習上・生活上、安心して留学生活が送れるサポート体制を整える。

センターでは、留学生の日本語能力を高めるために、初級から上級まで集中的に学ぶ4つのコースを開講している。アカ

海を越えていく、 海を越えてくる学生たちの 異文化交流の拠点で、 留学生教育のプロフェッショナルが キャンパスの国際化に奮闘する。

はちわか すみこ
お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学(人文科学修士)。立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部常勤講師、茨城大学留学生センター助教授を経て、2006年から現職。外国語(第二言語)としての日本語教育、日本語学習者に対する作文指導、自律的言語学習、言語学習環境などを研究テーマとする。

いけだ ようこ
米国・ペンシルバニア州立大学比較文学M.A修了。イースタン・ニューメキシコ大学、ペンシルバニア州立大学で日本語を教え、関西外国語大学専任講師、同助教授を経て、茨城大学へ。2010年から現職。日本語教材の開発、文学作品を通じた異文化理解などを研究テーマとする。



デミックな日本語を学ぶ学術日本語の授業や外国人研究生・大学院生向けの日本語補講も行なっている。

日本人学生が留学生に対して一対一でチューティングを行うチューター制度に加えて、留学交流室や国際交流サロン、留学生寮にも留学生の生活や勉強の補助を行なう学生チューターを配置している。登録された117名のチューターたちは、留学生との交流や支援活動に積極的に参加している。

日本人学生、地域との 交流の拠点をめざす

地域と留学生の橋渡ししも、センターの取り組みのひとつ。地域でのホームステイや、高校での母国文化の紹介など、異文化交流の機会を地域に提供しながら、留学生にキャンパス外にある日本の生活を体験してもらう。

学部などで学ぶ留学生には、卒業後、



2014年8月現在、23か国・287名の留学生が3キャンパスで学ぶ

日本での就職を希望する者も多く、就職ガイダンスなども企画している。

センターの、もうひとつの重要な役割は、日本人学生の留学支援である。日本人学生向けに、留学説明会や留学フェア、ガイダンスなどを開催し、海外の大学で学ぶ素晴らしさをPRする。

留学先で苦勞し助けられた経験は、帰国後、留学生たちへの共感と、彼らを助ける喜びに換わり、交流のバトンが手渡されて行く。単位の互換性、授業料不徴収など、協定校ならではの利点もさることながら、双方向の交流の素晴らしさが、ここにある。

海の向こうに広がる世界、 大学は船、舵取りは君だ。

「九五五年に天心偉蹟顕彰会会長・横山大観から茨城大学へ寄贈された岡倉天心の遺跡は、現在、茨城大学五浦美術文化研究所の管理を受け、近代日本の国際人の功績を今に伝える。セントルイス万国博覧会やボストン美術館での講演、英文書『茶の本』や『東洋の理想』出版など、天心の仕事は欧米への東洋美術や日本文化を啓蒙する画期的な活動だった。

研究所からの視界は太平洋の海。天心はこの地平線の向こうに何を見つめたのだろうか。世界は、海の向こうに広がっている。異国と呼ばれる見知らぬ世界へのあこがれ、うやまい、そして、おそれ。大学は、その航海にいざなう船。舵をとるのは君だ。



水戸キャンパス

| 人文学部 | 教育学部 | 理学部

〒310-8512

茨城県水戸市文京2-1-1

(代)029-228-8600(本部)



日立キャンパス

| 工学部 |

〒316-8511

茨城県日立市中成沢町4-12-1

(代)0294-38-5004



阿見キャンパス

| 農学部 |

〒300-0393

茨城県稲敷郡阿見町中央3-21-1

(代)029-887-1261

